

第131話 私の名曲100選(3) フランス編

エクトル・ベルリオーズ
1803-1869

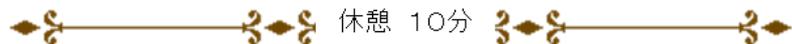
【今日の鑑賞】

5分で聴く名曲

- ・「天国と地獄」序曲 オッフェンバック
- ・「アルルの女」～メヌエットとファランドール ビゼー
- ・月の光 ドビュッシー

本日の主題

幻想交響曲 作品14 ベルリオーズ
第1楽章「夢、情熱」
第2楽章「舞踏会」

幻想交響曲作曲当時の
ベルリオーズ

- 第3楽章「野の風景」
- 第4楽章「断頭台への行進」
- 第5楽章「魔女の夜宴の夢」

【ベルリオーズ】

ルイ・エクトル・ベルリオーズは、フランスのロマン派音楽の作曲家である。『幻想交響曲』でよく知られているが、他にも『死者のための大ミサ曲』(レクイエム、1837年)にみられるように、楽器編成の大規模な拡張や、色彩的な管弦楽法によってロマン派音楽の動向を先取りした。開業医の長男として育てられる。

【固定観念】

幻想交響曲では、作曲者の恋愛対象を表す旋律が、楽曲のさまざまな場面において登場する。ベルリオーズはこの繰り返される旋律を「イデー・フィクス」(idée fixe、固定観念、固定楽想などと訳す場合もある)と呼んだ。これはワーグナーが後に用いたライトモチーフと根本的に同じ発想といえる。

【幻想交響曲】

フランスの作曲家エクトル・ベルリオーズが1830年に作曲した最初の交響曲。原題は『ある芸術家の生涯の出来事、5部の幻想的交響曲』。「恋に深く絶望しアヘンを吸った、豊かな想像力を備えたある芸術家」の物語を音楽で表現したもので、発作的にアヘンによる服毒自殺を図る。麻薬は致死量に達せず、彼は重苦しい眠りの中で奇怪な幻想を見る。夢の中で、感覚、感情、記憶が、彼の病んだ脳に音楽的な映像となって現れる。愛する人が一つの旋律となり、固定観念のように現れ、付きまとう。

第1楽章 夢、情熱

彼はまず、漠とした不安や情熱、理由のない喜びや憂鬱を思い起こす。次で、彼女によって点火された、燃えるような恋心、ほとんど狂気に近い苦悩、再び取り戻した優しさ、宗教的な慰めを思い起こす。

第2楽章 舞踏会

舞踏会の華やかなざわめきのなかで、彼は愛する女性の姿を再び見る。

第3楽章 野の風景

夏のある夕暮れに、彼は二人の牧童が吹く牧笛を聴く。静かな自然のたたずまい。そよ風に樹々がささやき、未来への明るい希望が膨らむ。しかし、再び彼女の姿が浮かび、彼は不吉な予感におののく。もし、彼女に捨てられたら…。再び牧笛が聞こえてくるが、もう一人の牧童はそれに応えない。日没、遠雷、孤独、そして静寂…。

第4楽章 断頭台への行進

嫉妬に狂った彼は、愛する女性を殺し、死刑を宣告されて断頭台に連れて行かれる夢を見る。その行列の行進曲は、時に陰鬱で荒々しく、時に輝かしく荘重に響く。固定観念が一瞬現れるが、それはあたかも最後の愛の追憶の如く、ギロチンの一撃によって断ち切られる。

第5楽章 魔女の夜宴の夢

彼は夢で魔女の宴のなかに居り、彼を弔うために集まって来た妖怪たちに囲まれている。奇怪な音、うめき声、けたたましい笑い声。その時、固定観念が現れるが、それはかつての気品を失い、野卑でグロテスクな舞曲となっている。彼女が、魔女となって現れたのだ。歓迎の叫び、甲鐘、『怒りの日』の下賤なパロディー、魔女のロンドが続き、最後は、『怒りの日』とロンドとが同時に奏されて熱狂する。